



Love is the essence of research life.

松永 幸大



私を温かく受け入れてくれた阪大工学部

生まれてから、東京の山手線の中で30年間過ごした私だが、釣りや登山などアウトドアが好きなこともあり、環境変化には順応能力が高い。それでもジョブインタビューで人生初めて足を踏み入れた大阪に、それも生物工学の総本山である阪大工学部に移動する際には、さすがに緊張した。細胞動態学研究室で、それまで触れたこともなかったヒト HeLa 培養細胞を実験材料に生物工学的研究を開始したときは、毎日、学ぶことの連続であった。必死で研究するうちに、いつしか生物工学的研究の楽しみに吸い込まれていき、徐々に研究開始時の緊張もほぐれていった。これも福井希一先生、内山進先生を始めとする研究室スタッフ、専攻の先生方が、基礎生物学分野から来た私に的確なアドバイスをくださり、温かく見守ってくださったからに他ならない。

シャトル研究者が広げるバイオ研究の裾野

基礎生物学から生物工学への研究環境の変化は大きかったのでは？とよく言われるが、私の場合、激変したわけではなかった。顕微解剖技術やイメージング技術を積極的に取り入れることが私の研究スタイルであったことから、技術開発をエンジンとして研究を推進する生物工学スタイルは、分子細胞生物学による基礎研究をしてきた自分自身にも適合していたと言える。また、最近、学際領域の研究が活発化しているように、昔ほど基礎と応用という研究領域に明確な線引きはなくなってきたと思う。基礎生物学的研究であっても、社会への出口を念頭において研究を進めるべきであるし、生物工学的研究を推進する場合でも、基礎生物学概念の理解は欠かせない。今後、基礎と応用の両分野をシャトル的に行き来するバイオ研究者は増加し、基礎から応用まで幅広く議論する時代が到来することは間違いない。

生物工学を教えながら学生を育てる楽しみ

東大理学部の人材育成の中で、アカデミック分野の熾烈な競争に生き残る術を徹底的にたたき込まれた私には、就職指向の学生が大半を占める阪大工学部の教育環境は新鮮であった。6年を過ぎて、バイオ産業界で活躍する教え子の話を聞くと、人材育成を通じて社会貢献することは「教師冥利に尽きる」ことを実感している。これは生物工学分野で教育する者のみが持ち得る特権であろう。また、博士号を取得する学生が激減する中、藤本聡君(ワイオミング大学分子生物学部ポスドク)、

東恒仁君(福島県立医科大学助教)、高田英昭君(国立遺伝学研究所ポスドク)など、アカデミック分野で勝負していこうとする研究者も生物工学の博士号取得者から巣立ったことは、嬉しいことである。

研究の楽しみは学生に伝播する

阪大工学部は伝統的に英語コースを併設し、海外留学生の教育にも熱心である。現在、マサチューセッツ州立大学生物学部でポスドクをしている馬楠君は、中国からの留学生であった。研究グループに加入後、一年ほど経過したバーベキューパーティーの折、「先生は何でそんなに楽しそうに研究して、毎日必死に論文書いているのですか？そんなに頑張っても給料あがらないじゃないですか？」と彼から聞かれた。「夢中で研究するのは、世界で自分しか知らない発見や技術開発ができるから。そして論文書いているのは、そのことを世界中の人に早く伝えたいから。楽しくてわくわくするね。」と答えた。彼は一瞬信じられない顔をしていたが、何か気づいた感じであった。その後、彼は私の厳しい指導にも耐えて、Journal of Cell Science 誌に論文発表して博士号を取得し、中国の大学のテニア職内定を蹴って、アメリカに移った。

自分の研究を愛して、与えられたステージで全力を尽くす

バングラディッシュからの留学生であったアミン君は、染色体タンパク質の fibrillarin の解析を研究テーマにしていた。ある日、彼が持ってきたデータを元に議論していた。その中で、すでに別の研究グループが報告していたデータを、アミン君は自分が新規に見いだしたデータだと主張した。私は自分のファイルから取り出した論文の Figure を示して、新規性がないことを指摘し、彼に “Do you love fibrillarin from the bottom of your heart?” と聞いた。そして「愛する人ができたら、その人のすべてを知りたいと思うだろう？それと同じだよ。君は、このタンパク質の情報をすべて知って研究しなくては行けない。」と諭した。彼はその後、私よりも fibrillarin について詳しくなったことは言うまでもない。彼は国際雑誌に3報の論文を発表し帰国した。

将来の道に悩んでいる若手研究者の方々に、私が伝えたいことは、どのような研究環境におかれても、自分の研究を深く愛してほしいということである。バイオの研究課題には、必ず自分の興味に合致して虜になる点が隠されている。“Love is the essence of research life.” 悩む間もなく、愛した研究テーマに脇目もふらず研究することで、新たな研究環境も、未来も開けてくると確信している。